

下さった手紙の中で引用されていた聖アウグスチヌスの言葉をご紹介します。それは単純な言葉のうちに、まさに今私たちが必要としているものを言い表

わしていると思われるから。「愛の空間をひろげる」(Dilatatur spatium charitatis) (お茶の水女子大学)

『ナルニア国ものがたり』全七巻

C・S・ルイス作 岩波少年文庫

森上 史朗

最近、人間の発達に果たすイメージションの役割が注目されてきています。認知心理学者ハワード・ガードナーによると、子どもの中に既成の約束ごとや形式にそって、ものごとを考えるのが得意な“パタナー”と、イメージションの働きがさかんで、自分自身の独自の考えを構成しようとする傾向

の強い“ドラマティスト”とがあるといえます。そして、今の学校教育や幼児教育はドラマティストを切り捨てて、パタナーをよりパタナーにしていく傾向が強いと批判しています。いわゆる“早期教育”といわれるものなどは、“パタナー”教育の典型ともいえるでしょう。

しかし、子どもであることの特性（＝子どもらしさ）は、子どもが自分の心を開放してイマジネーションの世界、ファンタジーの世界にひたれることだと思います。

私はルイスの『ナルニア国ものがたり』は、現存するファンタジーの作品の中で最高のものであり、これを超えるものは当分でないのではないかと思っています。

佐伯胖氏によると、子どもを理解することは、自分の中にある子どもらしさを発見することだ、といえます。すなわち、「こういう考え方、感じ方はついぞ忘れていた」、それを思い出すことが子ども理解だということです。それには、大人である保育者も、『ナルニア国ものがたり』のようなファンタジーの作品をぜひ読んで欲しいと思うのです。

ところで「ナルニア国」へ往く道は、一卷ごとにみな違いますが、往った先の世界で起こるできごととは違っていても、内面の世界ではひどく似

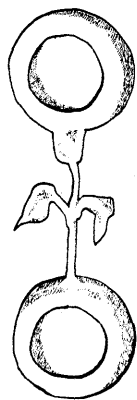
通っていることに気づかされます。たとえば『カスピア王子のつづえ』（二巻）では、学校の寄宿舎にもどる途中の四人の子どもたちが、乗り換え駅のホームのベンチに座っている時、不思議な魔法の力にひっぱられて、ナルニア国へ往ってまた駅のベンチに戻ってきます。往って還ってきた子どもたちにとって駅のベンチは「四人が思いこんでいたよりもはるかにすてきな景色に見えてきました。あのなつかしい鉄道のおい、イギリスの空、それにこれから始まる新学期『やあ、すっかり思いきり遊んじゃったなあ』とピーターがいました」

このようにファンタジーの国に旅してきた人たちはだれでも、その国の物語の主人公たちから、贈物をもらってきていることに気づきます。その贈物はこの世で贈られる物とは違って見たりふれたりほできないのですが、心の中に深く広がっていくものです。それは、ペベンシー家の四人のきょうだいにとっては、学校の寄宿舎に帰るつらい気持ちから立

ち直って、新学期に立ち向かっていくための勇氣と力ということができよう。そして、この物語の主人公たちといっしょに旅をした読者も、それぞれの心からまった糸をときほぐして、内なる力をとりもどしていくに違いありません。

ミヒヤエル・エンデは『はてしない物語』の中で、ファンタジーの国に行けない人もいるし、行けるが行きっぱなしで帰ってこれない人もいる。しかし、行って帰ってくる人だけが、この現実の世界をゆたかにすることができます、といっています。このことからわかるように、真のファンタジーの力とは、現実の困難をのり超える力そのもので、決して現実から遊離した絵そらごとではないのです。

この巻のあと、『朝びらき丸東の海へ』(三巻)



『銀のいす』(四巻) 『馬と少年』(五巻) 『魔術師のおい』(六巻) に続き、『さいごの戦い』(七巻) でこのぼう大な『ナルニア国ものがたり』は幕を閉じます。

これら全巻を通じて語られていることは、人間は死に至るまで、心の内へ内へと一つ一つ皮をはいで、今の世界を脱皮していくというドラマであり、それがこれほどまでに具体的で壮大なスケールで語られているファンタジーの物語は他にはないように思われます。だからこそ、このファンタジーの大作を読んだ大人も子どもも、同じ質の力をそこからくみとることができるのだと思います。

(日本女子大学)